

# 図書館情報大学における入学者選抜の分析

— 図書館情報大学, 磯谷 順一, 赤津 敏夫, 大学入試センター, 岩坪 秀一 —

## 1. はじめに

大学が、教育・研究について自己点検を行い、改革の努力を続けていく際に、特に大学における人材育成が社会のニーズ、時代の変化に込えているかという観点においては、外部からの評価を受けた上で改革の方向を決定することが望ましいと考えられる。図書館情報大学では、2年次からの履修コース選択においてアンバランスがあること（図書館司書を目指す「情報管理コース」を選択する学生が、「情報処理コース」を選択する学生を大幅に上回っている）、及び、卒業後の進路において社会のニーズと学生の希望とが必ずしも一致していない（企業からの求人が多いにもかかわらず、学生は狭い門となっている図書館司書に固執する傾向が強い）という問題を抱えている。この教育と進路における問題を、どういう人材を集めるかという入試の基本ポリシーに起因するところが大きいととらえ、入学者選抜について、有識者からなる入試外部評価委員会の評価を受けた。この外部評価の中では、高等学校の現場の教師からなる入試問題専門委員会に、過去3年間の試験問題を対象に、高等学校の教育に適切に対応しているかの観点からの評価を委嘱することも行った。試験問題の評価から出された提言の中で注目されることは、出題が大学の専門性に偏ることの危惧を指摘するのとは反対に、どういう人材を求めているかという大学の理念が見えるような出題を積極的に勧めるものであり、一定のスタイルを保つ一貫性を要求するものであった。入試問題専門委員会の報告を含めた外部評価の報告は「図書館情報大学入学者選抜に係る外部評価報告書」としてま

とめられている。

外部評価を受けるにあたっては、自己評価委員会、入試委員会および教育委員会から選出された委員からなる入試外部評価実行委員会が、事務局学務課の協力のもとに、教育・進路・入試の現状と課題についての基礎資料（現状分析、自己点検評価、問題点の整理など）を作成した。本論文では、外部評価を受けるにあたって大学がまとめた基礎資料のなかから、入試の現状を分析した結果の一部を報告するとともに、外部評価からの提言により新たな視点から入試問題を分析した結果を報告する。基礎資料には、入試関係の自己点検として、入試関係の統計データ（倍率、辞退率、再志願率、併願率、受験者及び合格者の都道府県別割合、男女比、現役・浪人比などの年次変化）、3年次編入試験における試験科目の根拠となった学歴別の入試成績の分析、追跡研究（選抜方法の異なる入学者の間の入学後の成績の違い、留年・進学との関連）の結果、大学説明会の成果と課題なども含まれている。なお、図書館情報大学では、①推薦入試（募集人員45人、実質倍率4.7倍、入試科目は能力・適性検査、小論文、集団面接）、②個別学力検査前期（95人、3.3倍、センター試験は国語、数学、外国語、2次試験は数学と外国語）、③個別学力検査後期（20人、4.8倍、センター試験は前期と同じ、2次試験は小論文）、④3年次編入学試験（一般・社会人）、⑤外国人留学生特別選抜を実施している。なお、括弧内の募集人員及び倍率は平成10年度入試についてのものである。

## 2. 入学者選抜の分析

### 2.1 選抜方法・入試成績と卒業後の進路希望・履修コース選択との関係

平成10年度入学者を対象にした入学時のアンケートによると、推薦入試、前期、後期の入学者とも、将来の希望職種として、司書を第1志望ないし第2志望にあげた者が80%を越えている。希望職種を2つあげさせたにもかかわらず、データベース加工、サーチャー、システムエンジニア、プログラマなど司書以外の情報分野を第1志望ないし第2志望にあげた者は、推薦入試では29%と低く、前期、後期ではほぼ半数を占めるにとどまっている。企画・調査・編集、営業・販売、一般事務、教員・研究者等など、情報分野以外の職種を第2希望に選択する者が多い。推薦入学者は、司書という強い進路希望を持っていることに加えて、文系が多いために、「情報処理コース」選択をためらうきらいがあると考えられる。推薦入試の不合格者の半数が、個別試験を受験しないのは、センター試験や前期の2次試験に数学が含まれることとも無関係ではないと考えられる。

学生は2年次から、「情報管理コース」と「情報処理コース」のいずれかのコースを選択して履修することになる。平成9年度入学生については、推薦入試入学者、前期試験入学者とも「情報管理コース」を選択した者がほぼ3/4を占め、後期入学者では2/3が「情報管理コース」を選択している。

前期試験では、センター試験（外国語、国語、数学の3科目600点）と2次試験（外国語と数学の2科目400点）の合計点を用いて合否を判定している。平成9年度前期試験入学者のコース選択についてみると、入学試験の成績に、次のように特徴的なパターンが見出された。

#### (1) 入試の総合得点と履修コース選択

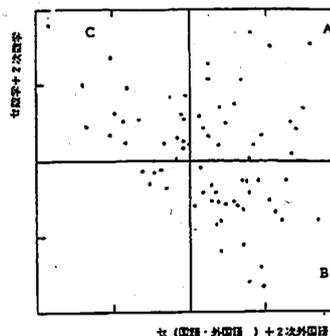
総合得点からみて3つのグループに分ける

と、第1のグループ（入学試験の成績が際だって優秀）のほとんどは「情報管理コース」を選択している。第2のグループ（入学試験の成績がやや良い、ないし、中ぐらい）は、「情報管理コース」選択者、「情報処理コース」選択者両方に分かれている。第3のグループ（入学試験の成績がやや悪い）では、「情報管理コース」選択者が多い。

#### (2) 文系科目と理系科目との相関

「情報管理コース」選択者、「情報処理コース」選択者に分けて、センター試験の国語、外国語と2次試験の外国語の合計点を横軸に、センター試験の数学と2次試験の数学の合計点を縦軸にプロットしてみた(図1)。このグラフから、入学者（合格者）は

情報管理コース



情報処理コース

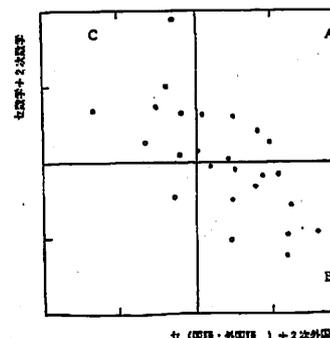


図1. 文系科目と理系科目との相関

- A. 数学の得点が高く、文系科目も得意な者
- B. 文系科目は得意であるが、数学の得点は比較的低い者
- C. 数学の得点は高いが、文系科目は苦手な者

の3つのグループに分けられる。Aグループのうち特に成績の良い者は「情報管理コース」を選択している。Bグループ、Cグループは、「情報管理コース」選択者、「情報処理コース」選択者の両方にみられるが、Bグループのうち、総合得点の低い者は、「情報管理コース」を選択している。

(3) センター試験と2次試験との相関

「情報管理コース」選択者、「情報処理コース」選択者に分けて、数学及び外国語について、センター試験の得点を横軸に、2次試験の得点を縦軸にプロットして得られるグラフからは次のことが読み取れる。

数学について(図2)は、数学が得意なグループ(センター試験も2次試験も得点の高い者)Dは、「情報処理コース」選択者よりも「情報管理コース」選択者に多い。センター試験の得点は高いが、2次試験の得点は低いグループEも、「情報管理コース」選択者に多い。

外国語(英語)について(図3)は、センター試験の得点は高いが、2次試験の得点は

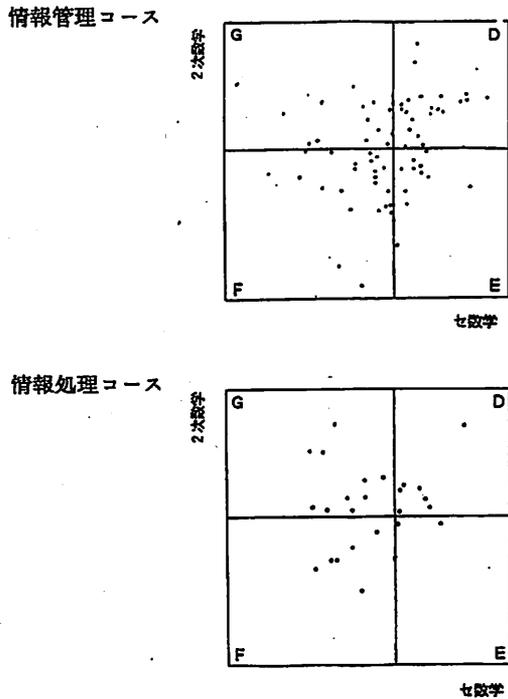


図2. センター試験と2次試験との相関(数学)

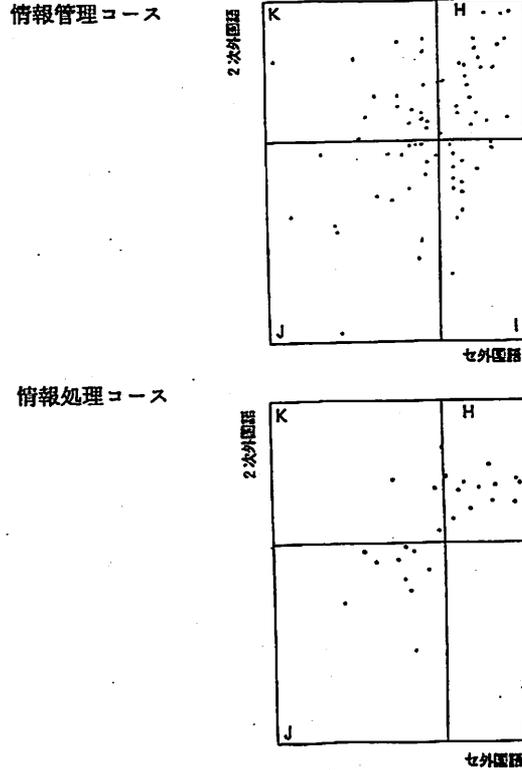


図3. センター試験と2次試験との相関(外国語)

低いグループIは、「情報管理コース」選択者に多い。

以上の考察から、次のことが示唆される。個別試験前期合格者には、文系、理系の両方の科目に優れ、センター試験の得点から見ればレベルの高い他大学に合格する実力があるというグループが含まれる。このグループは、文系、理系両方のセンスを持っている点で、本学が要請する図書館員にふさわしい資質を持っていると同時に、本学の「情報処理コース」のめざす教育にも適した人材である。このグループのほとんどの者が、「情報管理コース」を選択しているのは、司書という進路を前提に本学を志望してきているためと考えられる。「情報管理コース」選択者には、入学試験の成績が比較的悪く文系の傾向が強い者や、数学、外国語においてセンター試験は高い点を取れるが、2次試験のような応用力を問う問題は苦手である者も含まれる。これらの学生は、司書という進路希望に加えて、「授業が難しそうだから」というような基準でコース

を選択する傾向が強いのではないかと推測される。「情報処理コース」には、理系的傾向の強い科目や「プログラミング」など学生が初めて手掛ける授業科目が比較的多い。必修科目を廃し、すべてを選択科目にしているために、コンピュータ関連科目からの履修離れなど、学生が容易に単位の取れる科目だけを履修するという「易きにつく」風潮が蔓延していることも指摘されている。

## 2.2 推薦入試の面接の評価と他の試験科目の成績との相関

推薦入試においては、リーダーシップ、コミュニケーション能力などを見る目的でグループ討論形式の面接を実施している。図4には、面接の評価の優れた者（各年度とも、優れた者の合計を100%とする）が、能力・適性検査（大学で学習するうえでの基礎能力、適性の確認）と小論文とをあわせた評価の10段階（評価1が最も高い）にどのように分布しているかを示した。能力・適性検査と小論文とをあわせた評価と面接の評価との相関は強

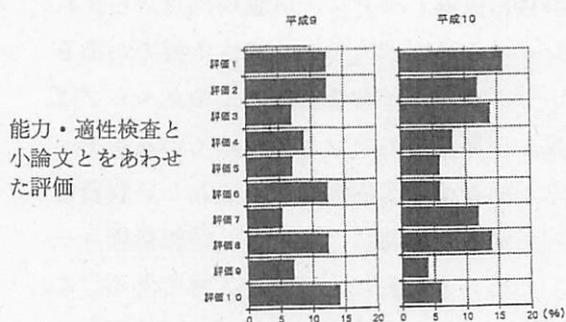


図4. 面接評価の優れた者の分布(能力・適性検査+小論文の評価別)

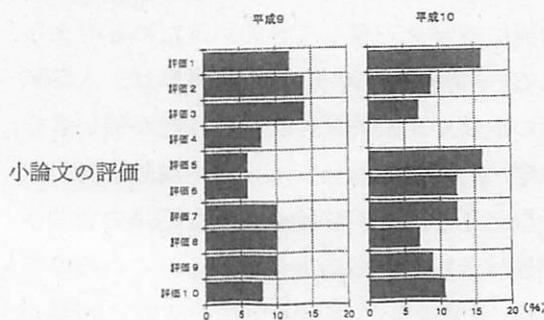


図5. 面接評価の優れた者の分布(小論文の評価別)

くないと言える。ここでは、平成9、10年度の結果のみを示したが、他の年度を含め長期的にみると、能力・適性検査と小論文とをあわせた評価と面接との評価との相関は、グループ討論の課題にも依存しており、高校生活や日常の生活に近い課題では相関が弱くなる傾向がある。どの年度においても、面接の評価の優れた者が能力・適性検査と小論文とをあわせた評価の下位にも現れている。なお、合否判定においては、面接において優れた評価に属しないと不合格になるというわけではない。

小論文では、「主として、論理的思考能力、表現力、広い視野からの発想、独創性などを見る」を出題意図としている。図5に示したのは、平成9年度および10年度推薦入試のそれぞれの受験者を小論文の評価を用いて、上位から順に1～10の10段階に分けた場合に、面接評価の優れた者（各年度の優れた者の合計を100%）の小論文10段階への分布である。

これによると、小論文として自分の考えを文章に構成する能力と集団面接のなかで自分の考えでグループをまとめていく能力とは必ずしも相伴わないと考えられる。

## 2.3 再志願者の成績の分析

推薦入試不合格者で個別学力試験（前期・後期）への志願を再志願と呼ぶ。再志願者については、同一の受験生が推薦入試と個別試験との2つの試験を受験しているの、2つの試験の成績の相関を見ることができる。

### (1) 推薦入試不合格者の個別試験前期における成績

図6は、平成9年度および平成10年度前期入試において、前期試験の総得点を用いて前期試験受験者の成績を上位から順に1～10の10段階に分けた場合に、再志願者（各年度の再志願者の合計を100%）が各段階へどのように分布するか示したものである。これによると、推薦入試において不合格となっても、個

前期入試  
総得点による評価

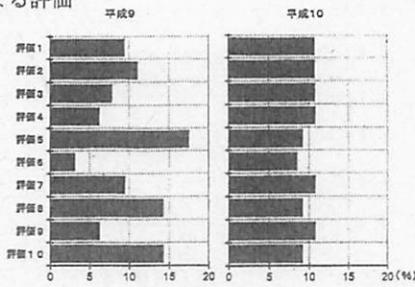


図6. 再志願者の分布(個別試験前期総合得点の評価別)

別試験で際だって高い得点をあげている者もいることが明らかになった。これらの受験生は、推薦入試において不合格となった後に、個別試験に再挑戦して合格している。本学では、推薦の要件を「国語、数学、及び外国語の評定平均値の合計が11.0以上」としており、高校での成績が、大学に入って伸びる潜在能力を持っているレベルであることを前提としている。ところが、推薦入試受験者には、個別試験で測った限りでは、学力においてかなり劣ると言わざるを得ない者もかなり含まれていることも判明した。このことは、推薦入試において、学力を確認する必要性を示唆していると考えられ、本学では、能力・適性検査を、大学で学習するに必要な基礎能力・適性を確認するものとして実施しているが、その得点を合否判定の総合点に加算するものではない。

(2) 推薦入試の小論文と個別試験後期的小論文との相関

再志願者のうち、個別学力試験後期受験者は、推薦入試と個別試験後期において、小論

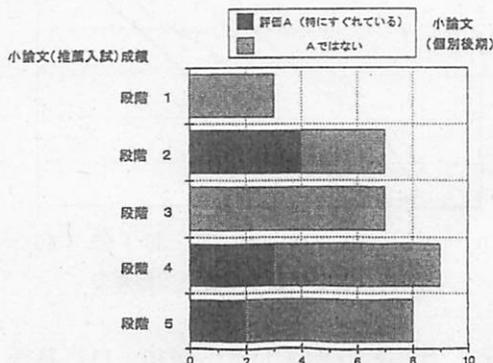


図7. 小論文(推薦入試)成績と小論文(個別試験後期)成績との関係

文を受験している。2つの試験の小論文の得点成績の相関を見ると(図7), サンプル数が少ないという統計上の問題点はあるが、小論文の得点は出題に依存する傾向が強いと言える。

2.4 2次試験の科目別・設問別の合否への影響力の分析

(1) 科目別影響力

平成11年度個別学力試験前期受験者を対象に、合格者、不合格者に分けて、センター試験(3科目600点)の得点分布を示すグラフを画くと、2次試験(2科目400点)による、合否入れ替り(逆転)が明瞭になる。合否入れ

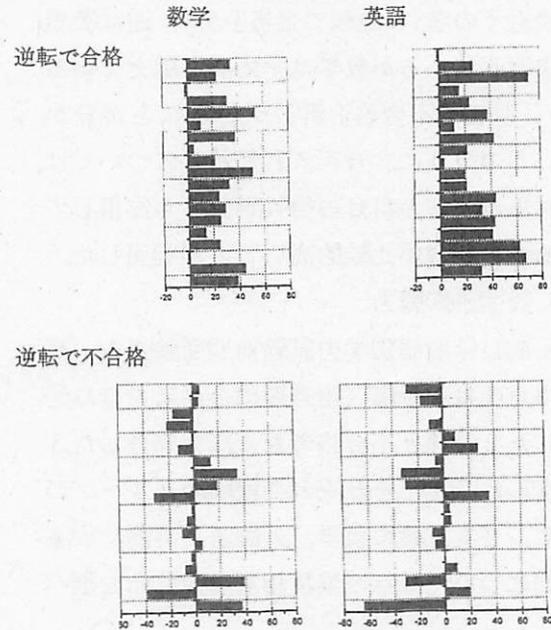


図8. 2次試験による合否入れ替り(数学と英語)

(平成11年度)  
(受験者数: 315名)

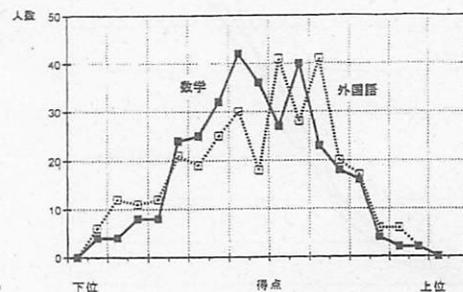


図9. 個別試験前期の数学・外国語の得点分布

替り者（逆転合格者19名及び逆転不合格者19名）について、2次試験の数学、外国語（英語）のどちらの科目が影響しているかを調べてみた。数学、英語とも、得点そのものでなく、得点とその科目の平均点との差をグラフ（図8）にすると、逆転の原因が分かりやすい。全受験者を対象にした得点分布のグラフ（図9）は数学、外国語（英語）の2科目の間で類似している（平均点、標準偏差とも2科目の間で大きな差はない）ので、合否決定の重みという点では、これら2科目のどちらかに偏ることはないことを示しているように見える。しかし、図8に示されているように、英語は高得点であるにもかかわらず数学は平均点近くの者（「逆転で合格」群）、逆に英語は失敗しているが数学は平均点を越えている者（「逆転で不合格」群）がいることが分かる。このように、合否入れ替り者については、どちらか一方の科目の得点が大きく作用している者の割合が比較的高いことが判明した。

(2) 設問別影響力

平成11年度個別学力試験前期受験者を、総合得点順に5段階（得点順に合格者をほぼ等分した2段階と不合格者をほぼ3等分した3段階）に分け、それぞれの段階のグループごとに、2次試験の数学、外国語（英語）の各設問について得点の累積相対度数分布を調べ

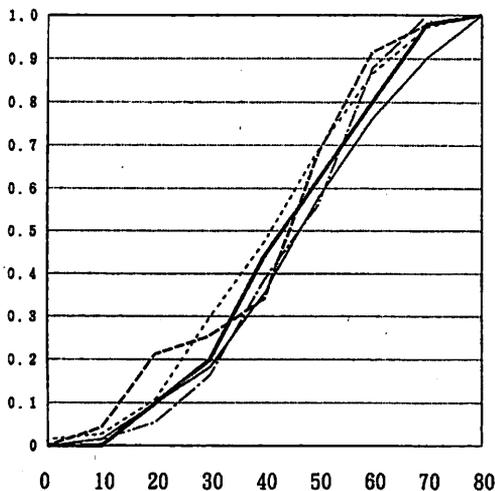


図10. 英語問題Iの合否への影響力

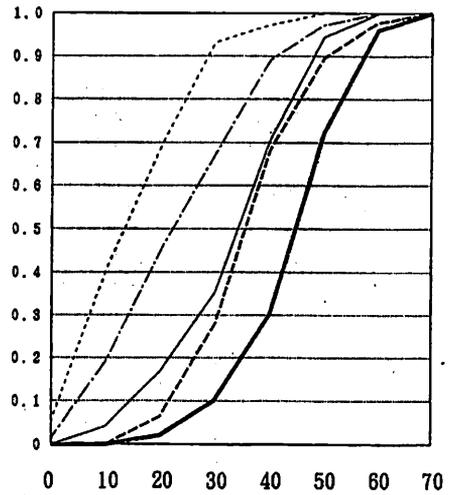


図11. 英語問題II設問1の合否への影響力

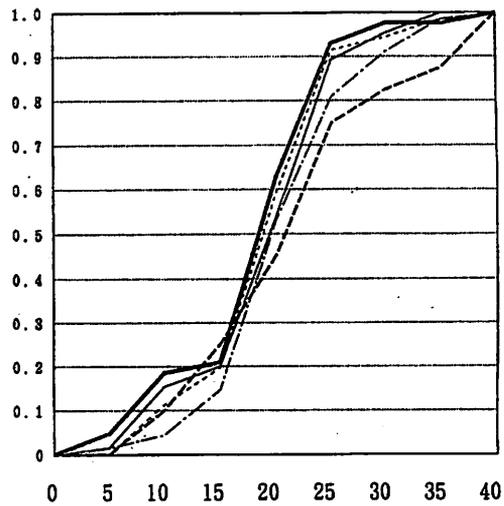


図12. 数学問題1の合否への影響力

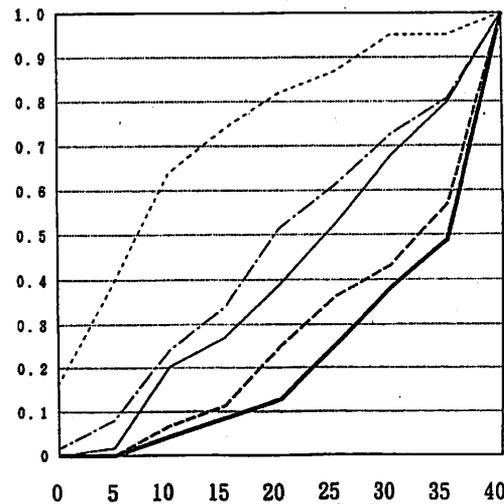


図13. 数学問題5の合否への影響力

てみた。代表的な例として、図10、11に英語の問題Iと問題II設問1の結果を、図12、13

に数学の問題1と問題5の結果を示した。図中の折れ線を区別するために、合格者2段階については、上位グループを太実線(—)，下位グループを太破線(---)で示し、不合格者3段階については、上位グループを細実線(—)，中位グループを一点鎖線(- - -)，下位グループを細破線(- - -)で示した。

英語の問題I，数学の問題1については、累積相対度数分布を示す折れ線が重なっていて、受験者の5段階グループの学力を十分識別していなかったことが分かる。これに対して英語の問題II設問1と数学の問題5については、5つの折れ線が重ならず、しかも下位から上位の順に並んでいて5段階グループの学力をよく識別していたことが分かる。換言すれば、合格者、特に総合得点の高い合格者に得点が高く、不合格者、特に、総合得点の低い不合格者で得点が低いという傾向が明らかに出ている。英語の問題Iと問題II設問1とについて、得点とセンター試験の英語の得点との相関をとってみた。問題Iについてはセンター試験の英語得点との相関がほとんど見られなかったのに対して、問題IIの設問1については、センター試験の英語の得点と比較的強い相関が見られた。

以上の分析結果は、合否への影響力という観点からの個別学力試験問題の評価として、出題改善に役立てることができる。

### 3. まとめ

入試の分析結果のうち、面接は他の試験科目とは異なる“ものさし”で測っている傾向が強いことが示唆されたことが特筆される。面接や小論文の成績が通常の学力と必ずしも相伴わないことは、多様な選抜方法という観点では評価されると思われるが、面接(グループ討論)の課題によって他の試験科目との相関の程度が異なったり、小論文の成績が出題に依存する傾向があることなど、今後検討すべき課題も明らかになった。個別試験にお

いて合否入れ替りに着目すると、2次試験の数学と外国語のどちらかの科目での高得点ないし低得点が効いている傾向が強い。2次試験の数学と外国語の得点分布は類似しているが、相関は強くない。面接の場合には、その評価の優れた者が他科目の成績の下位にも存在するために独立のものさしの傾向が顕著に現れるが、通常の科目間の相関についての詳しい分析も今後の課題と考えられる。合否への影響力が設問によって異なることも明らかになった。

小論文についての2つの試験における成績の相関、及び、2次試験の科目別・設問別の合否への影響力の分析は、外部評価からの提言により、従来行ってきた分析に加えて、新たに始めたものである。

### 参考文献

図書館情報大学. 図書館情報大学入学者選抜に係る外部評価報告書(平成11年5月).